

# 茶の湯文化学会会報 No.51

第51号/2006年11月30日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 第二十三回研究会報告

影山純夫

本年度第一回の研究会を中国浙江省で開催した。九月一八日の午後上海で東京からの参加者と大阪からの参加者が合流、夜の飛行機で寧波に向かった。寧波の宿舎は寧波大学の留学生宿舎ということで、日本の大学の留学生宿舎のような狭い殺風景な個室が並んでいる宿舎と考えていたが、やや建て付けに問題はあるもののホテルと代わらない立派な建物で、日本の大学との差を考えさせられた。

一九日の午前は研究発表会で、宿舎の階上の会議室で開催した。高橋忠彦副会長の開会の辞に引き続き、倉澤行洋会長から挨拶があった。会長は北京大学の季羨林教授との交流の中で結ばれた「知音」の間柄について話し、参加者に「知音」になろうと呼びかけられた。

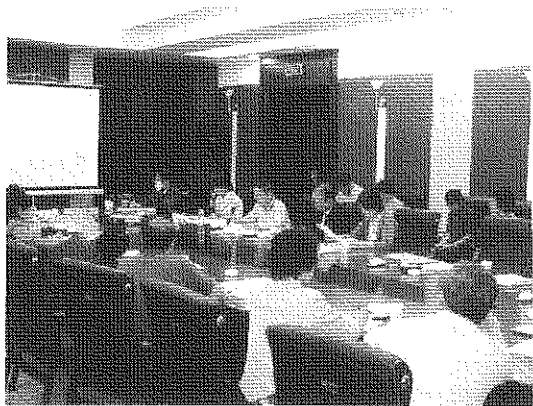
研究発表に移り、まず高橋忠彦氏は天台山石橋の羅漢供養茶に関する日本の資料について紹介された。浙江の茶文化の中心として天台山は存在するが、そこで行われた五百羅漢供養には茶が点てられた。その茶には花が生じると多くの禅僧が詩に詠んでいる。皇帝が五百羅漢に献茶をしたという記録もある。天台山では散茶が飲まれていたのではないかと。浙江の茶の研究に

は五百羅漢茶の研究は大切である。京都大徳寺所蔵の五百羅漢図はその五百羅漢茶を知るための貴重な資料である、と述べられた。

佐藤正光氏は浙江文化の伝統形成の出発となった西晋・宋時代の文化人の浙江（特に会稽）での活動について発表された。王氏や謝氏といった大貴族のこの地方での活動が目立つが、道教の聖地との関連がある。特に有名な洞窟との関係に注目すべきである。会稽は洞窟の入口で大きな洞天福地が広がっているというように考えられていた。洞天福地は名山景勝地の奥深くにあり、天に通じ福の多い所である。浙江には豊かな自然と水があり、このような名士の交遊もあった。唐代に浙江が文化の中心となるのは、そういった伝統があったからである、とされた。

岩田澄子氏は、天目茶碗の名称について発表された。天目は禅院の日常器であり、今日天目茶碗と呼んで尊んでいる物との間には、違和感がある。『茶席墨宝祖伝考』には天目山中峰の名がある。中峰は元時代の高僧で、天台山へ日本の禅僧が修行に行つたのは元時代であることを考え合わせると、天目は中峰の意で、中峰が使っていた粗末な茶碗を天目と呼んだ可能性が生

まれる。近年西天目山で窯跡が発見され粗末な天目茶碗が発掘されている。建窯のものを建窯、西天目山窯のものを天目と呼ぶべきではないか。中峰の影響は大きいと述べられた。



最後に、陳偉権氏が寧波の茶文化について発表された。寧波には長い茶文化の伝統がある。六〇七千年前の河姆渡文化にはすでに茶文化が存在したことを示す科学的な証拠があり、晋時代以前の道士丹丘子が四明山で茶を飲んで仙人になったとの伝えもある。唐時代の『茶経』には四明山で名茶が生産されたことが記されている。その後も寧波は、蟠龍茶、

白岩茶、天井山茶、曠舎茶などの名茶を生み出し、茶の輸出地ともなった。清時代後期から次第に茶の生産は減少し、戦時中は壊滅的な状況におちいったが、戦後は政府の政策によって再び茶の大生産地になり大輸出地ともなった、と述べられた。

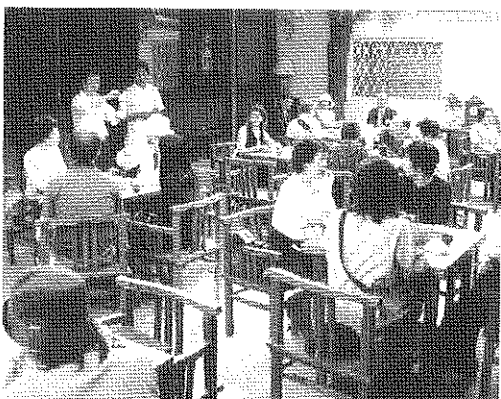
研究発表後、昼食を取りながら中国側参加者と交流の時間を持った。午後は寧波旧市街地の月湖中に建つ寧波茶文化博物館の見学を行い、茶の試飲も行った。

二〇日朝、バスで天台山に向かったが、途中百丈清規で有名な百丈懷海ゆかりの金峨寺を尋ねた。金峨寺は文化大革命でその主要部分を破却され、近年大雄宝殿が再建されたばかりであった。立派な建物ではあったがコンクリート造りで、古寺らしいところが感じられないのが残念であった。

天台山では石梁瀑布と羅漢信仰で知られる方広寺を尋ね、溪谷の風景美を楽しんだ後、天台大師の廟所である智者塔院を訪れた。天台山の稜線近くにある智者塔院は静寂に包まれており、修行の地であるとともに眺望を楽しむことのできる別天地であった。

二一日午前は国清寺の見学を行った。国清寺は、隋時代に始められた天台宗の本山で、

豊干や寒山拾得とも関係があり、名利中の名利といえる古寺である。隋塔など見所も多かった。午後は空路上海に向かい、夜茶宴料理でお別れ会を行った。



なお、寧波大学での研究発表については、会場設営などで、寧波大学の楊建華先生に大変お世話になった。最後になったがお礼を記しておきたい。



東京例会  
(平成十七年五月二十八日)

### 「錢椿年の『茶譜』と顧元慶の『茶譜』」

高橋忠彦

青木正児は『中華茶書』の中で顧元慶の『茶譜』が錢椿年の『茶譜(製茶新譜)』をそのまま用いたことを指摘し、「人の功を奪う」行為であると非難した。しかし、顧元慶は自らの『茶譜』が、錢椿年の著述を改変したこと、を明言しており、批判するには当たらない。顧元慶は、「群賢雜著」と「竹炉新詠」を削り、「竹炉茶具六事分封図贊」を付し面貌を新たにしているが、本体の「茶略」より「茶効」に至る各章については、「炙茶」の項を除いて、錢椿年の文章を用いている。しかし、ここを分析すると、ほとんど『茶経』と『茶録』からの抄出で成り立っている。

明代に入って一世紀余り茶書が著されることが少なく、唯一、朱権の『茶譜』が存在し、異彩を放っている。これは、宋代の点茶文化が既に滅んだ時代にあつて、葉茶を抹茶にし、点茶法で飲用する方法を述べている。茶書としての質は高いが、新しい時代の茶文化を反映しているとはいえない。それに比べ、錢椿年と顧元慶の『茶譜』は、不完全ながら、明代の泡茶文化を記録しようとする意図が窺える。

万暦年間、特に一六〇〇年前後にあたる時期に質の高い茶書が一斉に著される。屠隆の『茶箋』、張源の『茶録』、張謙徳の『茶経』、許次の『茶疏』などがある。これらの茶書は、過去の茶書に頼ることなく、自分の言葉で明代の新たな葉茶文化、品水文化と壺泡法を記述している。しかし一方で過去の茶書、陸羽の『茶経』を茶文化の開祖として尊崇している。万暦年の質の高い茶書と比較した場合、錢椿年と顧元慶の『茶譜』は泡茶文化自体が未完成もしくは流動的であった時代を反映し、完成度も独自性も低いものとなった。

しかし、『茶経』と『茶録』を再構成して用いようとした点では、ごく間接的ながら、後の時代を導くものであったということも認めてもよいであろう。

### 「岡倉天心『茶の本』の英語―絵筆を

持たない画家の言語表現」

東郷登志子

『茶の本』が文学作品であることを確認するため「The Book of Teaの英語」と「思想の多重構造と交響的音楽構成」という二つの観点からアプローチ。まず前提として「魚鱗鶴翼」と言われた天心の文体を、言語表現に

置き換えた私見を示し、「天心にとって翻訳とは何か」、「表現形式と言葉についての天心のこだわり」について翻訳の限界を感じた天心が「書き言葉」という有限な手段を補うために試みたと考えられる文体上の工夫を示した。またエズラ・パウンドの『読書論』から翻訳可能な要素と不可能な要素を検討。

天心は東西両文化圏に共通する詩的技法を駆使し、十九世紀から二十世紀の初頭、欧米で偏見をもって見られていた東洋の芸術・文化を異国趣味的で、奇異なものに終わらせることなく文学的価値を持った普遍的なものへと高めることに成功した。特に絵画手法としてカメラ・アイ、印象画的明暗法や感情表現、象徴技法をはじめ、絵巻物語的な動的描写、読み手の感情移入を射程に入れた振幅ある対比表現などが認められた。また仏教的死生観と道教的思想により、利休の凄絶な死に微笑みを添加する表現の異化を通して、「死」を終焉ではなく、「再生」のはじまりとして描いている。

大局的には天心の比喩は茶によって象徴される東西共存の理想「平和」と「調和」を暗示している。これらの多重構造は主題の提示方法によってシンフォニーの四部構成とアナ

ロジカルに統合されている。The Book of Tea は絵画性と音楽性の要素を取り入れた韻文化した散文文学であり、特論であった東洋的不二元思想と自らの芸術論の具象化および、東西文化の融合でもあった。その意匠は「絵筆を持たない画家」として、言葉によって「見えないもの」「聞こえないもの」を言外に描いた立体的な印象画であり、茶の文化を標題とする交響的音楽であった。

(平成十七年七月九日)

「『オールアバウトティー』における

日本茶道の記述について」

吉野亜湖

ウィリアム・H・ユーカー著『オールアバウトティー』は、大正期に日本を含む世界各国の現地取材を経て、昭和十年にニューヨーク Tea & Coffee Trade Journal 社より出版された。全二巻五十四章二〇〇頁に及び、歴史、技術、化学、商業、社会、芸術の六分野に記述され、世界茶文化大全というべき大著である。世界各国で翻訳されたが、日本語訳が未刊であるため、静岡大学で研究会を発足。

日本茶道は第二巻十九章「日本における茶

の賞賛」で、中国など他の茶文化はまとめられて他の章に収められているのに比べ、独立した章として扱われている。最初の一文に「茶の湯、それは日本が行った茶に対する偉大な貢献である。(中略)他国で類例なき茶文化」という著者の評価があらわされている。

天心の『茶の本』が出版されてから、日本茶道はアメリカ人によってどのように紹介されたのか。それは、本文の約五〇パーセントが『茶の本』の引用または参考にした記述であり、その存在の大きかったことが分かる。そこに欠けていた茶事の作法は、明治三三年

「ロンドン日本協会紀要」掲載論文(Organizer, W.H. Smith 著を引用している。そのほか、エドワード・S・モースの『日本の家屋』にある茶室の図や主客のイラストの工夫、大英博物館、メトロポリタン、ボストン博物館の所蔵写真・イラストを加えて茶道具を具体的に見せている。

歴史の記述はケンベルの『日本史』を引用した日本茶業組合作成の英文パンフレット等を参考に充実にしている。また英語圏の取材、情報については評価が高いが、日本茶道については、専門家の監修作業がなかったのか、誤った記述も無批判に引用されている。

「茶会記に見る茶道具の寸法」

竹内順一

桃山時代の茶道具に関する「見方」(つまり名物観)を追体験するためには、次の三つの手段がある。

第一には、当時から現在に伝存する「茶道具」、第二には、価値あるとみなした茶道具を簡条書きに列挙した名物記の類、第三には、茶道具を使った折の記録、すなわち茶会記中の「道具拝見記」である。これらを総合すると、請来・輸入唐物のすべてが無批判に「茶道具」に転じたわけではなく、ある一定の「規範」のもとに、選別されたということが想定できる。選別の事実には、名物記や茶会記に「目聞」「見出」「掘出」「分別」「見分け」等という言葉が登場することで明らかであるが、ある茶の湯者が「所持」することも、その人物の選別の結果であるとみなし得る。

名物と認められるには、良い「形(なり)」、使いやすい「比(ころ)」を呈し、「大きさ」が重要であった。『松屋会記』には、一五四二年(天文十一)四月三日の条、武野紹鴎茶会における「松嶋大壺」の「高一尺七寸・周三尺四寸三分」から一六四八年(慶安元年)三月二五日の条、金森宗和茶会における「一休宗

純墨蹟」の「縦一尺斗・横一尺三四寸」まで、唐絵、香炉、墨蹟、花入、茶碗、蓋置、釜、定家色紙、盆石など、ほとんど茶道具の全種類に関する寸法が七十四回にわたって登場している。いかに寸法について関心が高かったかを示している。

興味深いのは、これらの寸法が目測か実測か、凡そ判別が可能である点である。目測の場合は、「余(あまり)」や「程(ほど)」を付し、実測の場合は、伝聞記録や数値の末尾に「:あると」などの言葉が使用されている。実測は、「量目(一目は1.4か1.3cm)」を用いる場合が多いが、時には「扇」を使うこともある。

『宗湛日記』の一五八六年(天正十四)十二月十五日の条「玉潤筆洞庭秋月図」は、本紙縦横の寸法を断定表記し、「是ハカネニテ髓ニ取合」と付記し、上下から風帯までの表具の寸法は「是ハ見合也」と、峻別している。ちなみに唐絵の本紙から表具の寸法は合計十一箇所あり、記憶することは困難で、何らかの筆記用具持参で茶会に臨んだものと推測される。寸法(比)認識への執念は、改めて茶道具「選別」の実態を想定させるものではないだろうか。

(平成十七年九月十日)  
「円覚寺の伝法衣と表具裂」

佐藤留美

本調査の主な対象は、開山無学祖元(一二二六〜八六)の所用品を納めた「開山箆筒」収納品(重文含む)、及び円覚寺塔頭伝来の「伝法衣」計六領などであった。なかでも以下の三件は特に注目される。

(一)南宋・元時代の渡来織物で作られた「九条袈裟」計三領の存在である。九条袈裟は、師から法を嗣ぐ弟子に渡される「伝法衣」である。広げると長さが三から四メートル近い禅宗特有の大きな袈裟で、「大袈裟」の語源にもなった。現在も開山忌などの特別な行事に纏う格式の高い正式な袈裟である。

(二)うち二領は、墨書により伝来が確認されること。一領は、足利尊氏(一三〇五〜五八)の花押と墨書を有し、夢窓疎石(正覚禪師一二七五〜一三五二)が使用した九条袈裟。もう一領は、浄智寺住持の無象静照(法海禪師一二三四〜一三〇六)の伝法衣である。

(三)特に(二)の無象静照所用の九条袈裟は、その織り文様が、大覚禪師(蘭溪道隆一二一三〜七八)の頂相に描かれた「九条袈裟」の文様にある「柿の蒂文様」と酷似する。同時

に、南宋時代一二七四年の銘を有する江西省得安県南宋周氏墓(一九八八出土)より、同様の文様構成が地紋となった夾纈裂の出土例がある、といったことなどである。

茶の湯の四大茶会記に記された墨蹟の表装裂の傾向をみると、上下には茶・こび茶など茶色系の北絹が目立ち、中廻しは浅葱・白の金紗、金襴、一文字・風帯は紺・萌葱系の金紗か金襴が多く記されていることが分かっている。今回の調査から、「薄茶地平絹九条袈裟」が、茶会記の墨蹟表具の上下と同種の裂地の可能性を秘めている。更に「浅葱地小牡丹文金紗九条袈裟」は、茶会記に記されて表具の中廻しにしばしば記された浅葱の金紗にあたるのではないかと。桃山時代の四大茶会記に記された墨蹟表具の色彩・素材は、円覚寺開山時代に活躍した高僧たちが、大陸からもたらした法衣のそれに通じるということである。茶の湯において古くから尊ばれた墨蹟表具の形式には、鎌倉時代に伝来した初期の禅宗法衣の姿が、表装の伝統として、今に受け継がれているのではないかと指摘。

「薩涼軒日録」

吉岡明美

唐絵と呼ばれる中国請来の絵画の内、特に足利將軍家伝来の作品が東山御物と呼ばれることはよく知られている。表装は、一文字・風帯、中廻し、上下すべてに金欄を用いたものが多く、東山金欄と呼ばれる名物裂も散見される。金欄の他に金紗、金羅、印金もみられるが、金糸を用いない緞子や綾などはわずかである。このような表具の趣向は、室町時代後期から江戸時代初期にかけて記録された、四大茶会記にさかんにみることができ、十六世紀後半、信長・秀吉時代、床を飾った唐絵の金欄表装は、東山時代の趣向を継承したものと考えられる。

『蔭涼軒日録』の唐絵の表装に関する記録を検討。六代義教、八代義政、九代義尚、十代義植の期間、東山時代を中心とした時期に記録され、京都五山、室町幕府をめぐる政治経済、文芸を知る貴重な資料とされている。掛軸の形式としては、いずれも三幅一対の金欄表装。表装の形式は、「総縁」「中へり」「小縁」の表現から、上下のある三段表具ではなく、表具の裂地が本紙の四周を囲む、本尊表具の形式であることが分かる。四大茶会記に記された唐絵の表装は、萌黄、浅葱、紺、白地金欄などが主流で、他に香、丹わずかに

紅がみられる。明より舶載された金欄が、禅僧の袈裟に重用されたことは、高僧所伝の袈裟の頂相などからよく知られ、法体の義満・義教像にも見ることができ、金色に輝く美しい渡来織物が、禅僧や將軍を荘厳し、さらに憧憬の舶来芸術、唐絵の表装に仕立てられていくことは、自然な過程であろう。中国の文献によれば、宋・明時代の表装は綾か絹であり、金欄を表装に用いる趣向は、室町時代、我国において発達したものと思われる。『蔭涼軒日録』にみる唐絵の金欄表装は、桃山時代にも珍重され、今日なお受け継がれている。

#### 近畿例会

(平成十七年十二月十日)

#### 「鳥取藩茶道役の研究」

岡 宏憲

鳥取藩の茶道役は「御茶道」(馬廻格)・「御数寄屋方御道具預」(御徒格)・「御数寄屋坊主」(御掃除坊主格)という役職に分かれていた。御茶道とは茶道役のトップで「士」の格であり、主に御数寄屋方で御数寄屋方御道具預や数寄屋坊主に指示を出すことが仕事であった。

御数寄屋方御道具預は「徒」の格であり、道具の管理や茶会の運営などを行い、御数寄屋坊主はその末端で働くという構図であった。

御徒と御掃除坊主との間の昇格・降格には法令が定められ、一定の勤続年数を超えないと忝にその格を譲れないという決まりがあった。この決まりに則り御数寄屋方御道具預と御掃除坊主の人事が行われていた様であるが、茶道役の場合は茶事に関する知識・経験などが重要な要素であったと考えられる。またある時期までは御数寄屋方御道具預から御茶道への昇進も見られたが、世が安定してくるとそれがなくなった。そこで茶道役の者達は他の役職で昇進を目指す事となった。

鳥取では志野流茶道が盛んであったという研究があり、藩士の中にも志野流を学ぶ者が多かったとされていたが、史料からは、そのような形跡は見られなかった。鳥取藩には、東館・西館と呼ばれた二家の分家があり、文化活動が盛んに行われていた。従来の研究は、この分家での志野流を指していたのではない。特に東館においては、家臣に裏千家の免状をとらせるなど積極的な活動がみられる。藩内では遠州流・石州流・志野流・裏千家流などが混在していたと考えられる。

#### 東京例会

日時：一月二十七日(土)午後二時

場所：東京芸術大学

演題：「(仮題)松平定信の茶の湯」

谷村玲子氏

演題：「今泉雄作について」 依田 徹氏

#### 近畿例会

日時：一月二十六日(金)午後七時

場所：池坊短期大学

演題：「東山遊楽図屏風に見る小屋掛けの茶屋について」 雨宮六途子氏

演題：「十六世紀末葉から十七世紀初頭の堺における煎茶の出現」 森村健一氏

日時：二月十六日(金)午後七時

場所：池坊短期大学

演題：「近世の茶道役について」 (仮)

岡 宏憲氏

演題：「土屋政直の茶室について」

日向 進氏

日時：三月九日(金)午後七時

場所：池坊短期大学

演題：「茶の湯以前―振り茶から

茶道役は時代を経るにつれその形を変え、本来の茶事を取り仕切る役から、茶道役で出世が見込めなくなると他の役職での出世を目指すようになり、いわば出世の足がかりとして利用されていた様である。

#### 「文化系統学と茶道史」

矢野 環

文化系統学という言葉は、最近アメリカで使われ出している。一九九〇年代から非常に発達してきた形態測定学(モルホメトリクス)は、現在考古学の分野で使われ始めているが、今後茶道具や建築の解析に非常に有用だと考えている。

文化系統学では、系統推定論として、生物の進化的系統関係の推定、無生物の歴史的由来関係の推定が重要である。また「過去を復元すること、言語学・写本系譜学の方が時期的には古い。写本は、生物よりも一般に困難なことが多く、方法論やプログラムの確立が必要である。文化系統学において、伝書・名物記の解析は、異本の系統の精密な分析、同種のものとの系統の時代的流れなどを総合して、「生命誌」(名物記生成構造図)が数理文献学の一つとして捉えられる。またデータサ

#### 例会のご案内

イエンスの文化への適用として、形態測定学が道具の解析に使え、道具系の研究や建築系の研究にも応用可能であると考えているが、日本ではあまり浸透していない。解りやすい例として、三十六歌仙絵巻を探り上げ、その系統から歌仙の歌が、絵巻によって異なるので、歌を分類して(番号で)表現し一覧を作成する。このデータをもとに、系統を推定できるかを検討する。佐竹本、北野神社本など三十六の数字列、二十五組になる。その相違は、遺伝子のように考える。系統がわかれば、分類は可能となる。統計学の多変量解析よりも強力で、数量化Ⅲ類のグラフによって示すことができる。

また名物記でも、利休百会記でも同様に応用可能であり、『山上宗二記』に記載されている道具を良く見れば、これまで気づかれていなかったが、永祿的な記載であることが明白である。状況が数理的手法で見やすくなったと考えられる。玩貨名物記の場合は、史料が豊富なため、歴史復元がほぼ完全にできるので生命誌的捉え方が正確に行える。

茶の湯へー」 漆間元三氏

演題：「旗本茶人考―舟越伊予守永景と多賀左近常長についての基礎的考察―」(仮)

八尾嘉男氏

### 高知例会

日時：十二月十日(日) 午前十時～十七時

場所：高知県立文学館 慶雲庵茶室

演題：「現在の侘び茶をテーマとしたシンポジウムと茶事」

日時：二月二十五日(日) 午前十時～十二時

場所：高知県立文学館 慶雲庵茶室

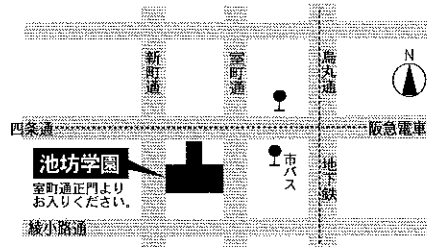
演題：「久右衛門日記を読む」

### 平成十九年度大会発表者の募集

学会事務局では来年度の大会発表者の募集を行っております。

大会予定日は五月十九日(土)、二十日(日)ですが研究発表は十九日に池坊短期大学で開催する予定です。ご応募お待ちしております。

#### 近畿例会々場 (池坊短期大学)

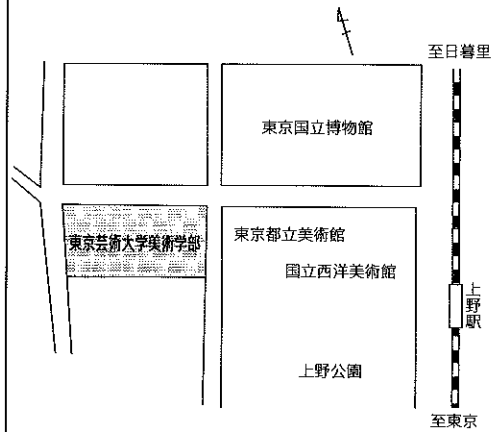


最寄り駅 地下鉄/四條駅/ 阪急/烏丸駅(地上出口26番) 市バス/烏丸四條

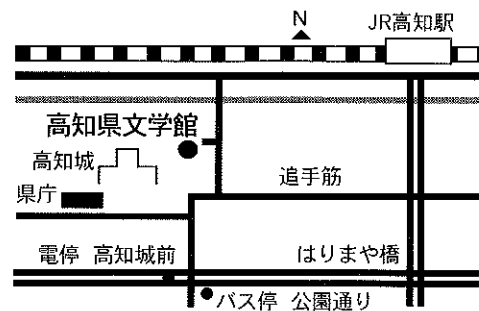
池坊短期大学・池坊文化学院

〒660-8491 京都市下京区四條室町鶏鉾町 ☎0120-67-3852

#### 東京例会々場 (東京芸術大学)



#### 高知例会々場 (高知県文学館)



高知県丸ノ内1-1-20

\*前号に東京例会ご案内を掲載いたしました  
が、岩田澄子氏発表のタイトルの誤字が有  
りました。(誤)「相判者」、(正)「相伴者」  
です。申し訳ございませんでした。また東  
海例会も「尾張藩加藤忠三朗家の歴史と釜  
の製法」加藤忠三朗氏発表のご案内でタイ  
トルの後半と発表者名が掲載されておしま  
いでした。重ねてお詫び申し上げます。  
\*前号でもお知らせしましたが学会のホーム  
ページが更新されています。例会のご案内  
や研究会の開催などについても随時お知ら  
せします。是非ホームページもご利用下さ  
い。